松　山――東　京

鳥　海　光　弘（地質学教室）

松山は紅葉が遅い，11月末から12月にかけて松山平野の周囲の山々が色づく。この時期には四国でも冷い風がまま吹くが，小春日和の時がかなり多い。そこで私のように岩石学の一学徒にとっては，この時期の調査はまことにうれしい。第1に真夏の暑さから解放された山々は実に新鮮で，色づいた木々の間を調査行することは室内作業のいらいらを十二分に解消してくれる。調査行にはしばしば海岸を選ぶことも多い。これは海岸が草木におうわれることなく，様々な岩石の様子を連続的に見せてくれることが大きな理由なのですが，又晩秋の海が波頭に光る太陽の光が濃いブルーに美しく映えるのも楽しみなわけです。この時期の東京はすべてに冷く，空気が乾燥して吐く息が白く濁る。

7年前までは東大の総合研究資料館にいたのですが，この時期の東京近郊のことはまったく忘れていた。人の体感気候が記憶をさまたげているのかもしれない。木枯しだけが純化して残ってしまっている。そのように環境適応しきって松山から東京へ来てみると夏はたいへん涼しく，秋は大変早くやって来て残暑というものの実感がなく晩秋を迎えてしまう。

松山での研究教育生活は新しい教室であったため大変活気にあふれ，楽しいものでした。学生の質は，最近よく人々のうわさにのぼる程には低下してはいないというのが実感でした。それは大きくは授業をうける態度とテストに臨む態度に発するものだと思う。特に地方の小都市の学生がややもするとすぐ無気力に落ち込むのは，自分達の能力を過小評価することによっているようにも見える。卒論や卒験で意義のはっきりした仕事や，新しいことを導き出せる研究が出来ると，我然，自分から様々な論文やテキストの類を乱続し始める。そのようなプロセスは昔も今も多くの人々の個人的な経歴の中に埋め込められていると思う。たぶん研究という行動の原初的なものなのでしょう。東京での研究教育生活の中に，そのようなプリミティブな“もの”を経験できるとしたら大変楽しい。地学現象を研究する者にとって，その感は深いのではないでしょうか。その過程を分解して見ようという方法をとらざるを得ないとき，その素過程が単純で理解しやすい形におき替えられたら，それはたぶん至宝の“もの”なのでしょう。それを望むことは研究教育生活を続けていく大きな動機になっています。